

村田龍馬が蓄えた 直伝のAbility

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■美しい建築

キリンプラザ大阪で、建築家の高松伸さんが日本建築学会賞を受賞したのが1999年。建築を志す者なら、大阪へ行くと必ず立ち寄る建物だった。このシンボリックな名建築ができた年は、若手の構造家でも忙な村田龍馬さんは、京都大学工学部情報学科の学生。高度な情報化社会での道を求めて高度な勉学に勤しむ、多分、生真面目な学生さんだったのです。卒業してから彼が、建築学科に入り直したのは、実態の在るモノ造りへの郷愁だったのかしら。はたまた、建築家・高松伸の研究室に籍を置くのが目的だったのだろうか。引き続き、高松伸建築設計事務所に入社。超真面目な所員としての4年間を過ごしたことで、推察します。昨今、その経歴が独自で、注目されている構造家・村田龍馬伝なり。

高松伸が生み出す建築は、時により形態に変化があっても、間違いなく時代を超えて美しい建築。「美は変化するものと捉える」という高松伸哲学は、ぶれることがない。

村田龍馬さんが在籍していた頃の先生の様子が、興味津々。曰く、「事務所は常に奇麗でなければならなかった」（素晴らしい!）。「デスクが汚いと、注意メモが置かれていた」（真似します!）。「大掃除は3日連続」（凄い〜）。が、几帳面すぎて排他的な方でもないようで「何事にも首尾一貫としているのですね」と覇志堂も感心することしきりです。繊細な模型造りに疲れているスタッフを、食事や呑みによく連れ出してくれる、気さくな親分肌でもあったのです。

■構造で正解

高松伸建築設計事務所では、和歌山県庁南別館新築工事に従事。機械空調に頼らずに風を抜く設計が求められる公共建築。サッシと一体化したカーテンウォール、そして、プレスが特徴的な建物の、前面に

出た構造体（梓設計担当）に惹かれた村田さんです。

村田さんが構造へと興味を移した時、紹介者がいて、大構造家・川口衛の事務所へ転職が決まり上京。2014年に独立するまで、じっくりと7年間の修行僧。川口先生に直接指導を仰ぐ前には、自分で考え抜いてからという基本姿勢で臨んだ。穏やかではあっても、厳しき的確な指示を直接受けたとは贅沢でした。「無から有を生み出す意匠より、建物を具現化していく構造が面白くてならない、構造を選択して正解でした」。二人目の偉大な師匠に学んだのです。

所員時代で思い出深いのは、宮崎スギの集成材で造った屋外ステージの屋根（内藤廣建築設計事務所、2010年、日向市）を担当したこと。「木造が好きなんです、その仕事のおかげで」。

■設計所

MOAの望月協子さんが意匠設計をした、超薄型硝子を室内の仕切り材として使ったインテリアが創立しての初仕事。施主の三芝硝材株式会社による加工で、厚みが1.1×2mmの特殊合わせ硝子（製品は旭硝子）の大きなスクリーンが、キャスト材とケーブルで固定されている。写真からも感じられるほどに、ゆらりと揺れる美しいパーティション。構造と意匠の下地があるからこそ、この作品が誕生したともいえるでしょう。「折板屋根の家」は蘆田暢人さんの設計で、近頃完成した。これも構造設計の工夫を感じる空間性のある建物です。決して雄弁ではないけれど、設計意図の説明は、迫力ある声が出る。一国一城を仕切るだけのパワーは、両師匠ゆずりなのです。

社名の「設計所」、HPに明記された「業務範囲」、それぞれに深い思入れがありそう。静かな雄弁者は、深いAbilityを感じさせる気鋭です。

